

～安全安心な子供たちの未来のために～愛知大会 記録

2004.10.17. 於 愛知大学コンベンションホール

【第一部】

鈴木久行氏(愛知県警銃器薬物対策課長補佐)「国内の銃をとりまく現状報告」

砂田向吉氏「父の闘い～銃器製造責任訴訟、米国裁判史上初の勝訴、原告団唯一の外国人」

これは92年の2月の24日、パリで取材を受けた時のものです。当時、私はベルギーのルーバン・ラ・ヌーヴというブリュッセルから電車で1時間ぐらいの所に客員研究員に行っていました、そこで、「今、勝ったよ」という第一報の電話を貰ったのです。

私の息子が事件に遭遇したのは、1994年の8月の4日です。記憶の中で正確な時間は分かりませんが、夜11時くらいだったと思います。私はその時、カリフォルニアのサンノゼのスタンフォード大学に仕事の関係で行ってしまっていて、サンノゼに戻ってホテルに入ってから、友人の家に食事に招かれて行った時に、たまたまホテルに電話した部下が、緊急の用事がある、日本に電話しろというメッセージが入っていると言うのです。訳分らないで、着いたばかりだったんですけど、すぐ電話を入れたら、女房が電話の向こうで声にならない、何か異様な感じで「落ち着いて聞いてね、落ち着いて聞いてね」。落ち着いてないのは本人なんですけど、で、「どこを撃たれたのか」ということを言ったことを記憶しています。私は戦後の生まれですから、戦争を知りません。撃つとか撃たれるという、そういう感覚もございません。撃たれたということと言われても意味がよく分からない。

それで思い出したのです。私は今でこそ服部さんご夫妻とお付き合いさせて頂いていますが、テレビの中で記憶していた剛丈君事件。自分の身に降りかかって来るとは、ユメユメ、まさかまさかのことでした。「どこ撃たれたんだ」と言う一言は、今でも忘れませんが、「頭を撃たれた」というのです。頭を撃たれたということを聞いた途端に、どうでしょうかね、皆さん、その時、自分がもしそういう言葉を聞いたらどんなに感情が変化するかということ・・・私も考えたこともありませんでしたが、大変びっくりしました。びっくりしたというより、もう青天の霹靂というか、頭の中が真っ白になった感じです。それから取って返すようにサンフランシスコまで、約2時間半ぐらいかかるんですけど、送って貰って、夜11時30分位のフライトに飛び乗って、ニューヨークに向かったんです。それからです。延々と裁判に持ち込むまでの時間が来る。やっと息子に一矢報いたということの、犯罪史上初の製造責任を認めさせたという、こういう報道が出るに至ったんです。

ちょうど今日、取材にみえていた方、それからYOSHIの会の方が言っていました、今アメリカは大統領選挙ですね。これは96年の選挙です。シカゴ、浜田民夫と書いてありますが、この方は今は西日本新聞の論説委員長で福岡の本社の方に配属で来ています。ちょう

ど彼も友人なんですけど、赴任した、すぐくらいに私の息子の事件を報じなければいけない不幸にめぐり合う。この当時はクリントンの再選が問題になっていて、ブレディが撃たれてブレディ法案を作るという追い風で、大統領選挙が銃規制ということを出してありました。これはこの後の選挙ですね。カリフォルニア州が大変な票田であるということで、ゴアの、カリフォルニアの選挙の争点についての話でございます。マイケルムーア監督の映画で、チャールトンヘストン NRA 会長の、前の会長はブッシュのオヤジです。NRA、日本人の方にはなかなか馴染みの薄い言葉ですけども全米で、もうすごい巨大な団体ですね。ナショナルライフル協会。ここのメンバーの大半は実を言いますと、警察官なんです。職業的に言いますと、警察官と銃は一番関係が深いですから、そういう意味での団体だったらいいんですけど、やはり共和党の政権にとっては大票田を作る大きな大きなロビー団体でございます。

これはエリザバースという、私と裁判をずーっと一緒に闘ったパートナーの弁護士です。実を言いますと、さっき言いましたように、私は息子を殺されて悔しい一心で、遺体に会う時・・・8月の5日6日、このあたりで私はニューヨークで息子と対面する訳です。行った時は脳死状態でしたが生きていました。まだ温かい体です。脳死という感じ。今だったら、脳死の意味を報道を通じて知っていますし、自分でも勉強しましたから分かります。又今では、厚生労働省の、異色の、あるワーキングの委員会に入っております、本当によく分かるんですが、お医者さんがすぐに言うんです。「あなたの息子は脳死している。すぐ脳死サイン書にサインしてくれ」と。「何を言っているか。とぼけるなこの野郎！」という気持ちもものすごくありました。結局遺体ではないんです。いわゆる「怪我をした息子」ですね。

撃たれるという傷をどういうものか、皆さんあまり想像することはないでしょうけど、私が息子に対面した時は眉間に穴が開いていました。頭はぐるぐる巻き。こっちから弾がぬけてるんですね。ぐるっと回って。そういう状態の息子に対面して「貴方の息子がどうか確認してください」。ガーゼが置いてあった目のガーゼを下ろしますと、眼ん玉が飛び出ているんです。そんな自分の認識しない息子に会いたいと思いますか？びっくりすると言うより、もう言葉が出ない。

ただ、服部さんとかですね、それから中田さんがカンボジアで殺された時のお父さんの毅然とした態度が、頭の中をグルグル巡るもんですから、「人前で泣けるか！」という気持ちと、何かお母さんのように抱きしめたいという気持ちと両方、心の中で葛藤しながら、まだ、生温かい体の上に涙をポトポトポトポト落としました。悔しいですね。そういう思いから脳死に至る過程においては、人工維持装置が色々ついていきますね、あれを自分で外さなければいけない。脈をとるんですけど、ドクドクドクドク打っているんです。最後まで、ドッ・・・ドッ・・・と続いて「父ちゃん、死にとうない死にとうない」って言うような感じがずーっと脈の中に伝わって来る。そして「臨終です」と言われ、それから遺体になるん

です。過去テレビで見たご遺族の方々は皆、茶毘にふされて遺骨で持って帰る。僕はどうしてもこの子は遺体で持って帰りたい。当初は訳が分からんものですから、生きたまま連れて帰ると我儘言いました。お金がいくらかかるかというのも想像もしません。で、それぐらいはファーストクラスを全部チャーターして、医療チーム 4~5 人、医療ベッドを入れて帰らないとダメだ。「なら、それを予約しろよ」と言って、やり合いました。で、次の日行ったら、当然のことながらお医者さんの「もう体が変化していますから無理ですよ。朝、来てみて下さい」と言ったとおりでした。8月7日の8時何分ぐらいですかね、もう体が真黄色です。顔はもうこんなに浮腫んでいますしね。いわゆる機能不全に陥っている状態の息子に直面しました。それで解剖に回されるんですけど、解剖しなきゃ連れて帰れないということだったので、しかたなく、解剖に出したのです。結果的にはそれで良かったんですけど。で、アルミの弁当箱のような棺桶に入れて、遺体で持って帰りました。

ここで、この彼を何故紹介したいかというのは、誰も弁護士が引き受けてくれる人がいなかったんです。今日来ている小田啓二君、小田啓二君はガーディアンエンジェルスでニューヨークの本部長しています。私は1ヶ月後にリターンマッチをするんです。ジュリアーニに直訴に行くんです。その時も日本領事館・日本大使館、屁にも役にも立たなかった。会わせてくれてアポイントとって行ったんですけど、会えない。会えないんじゃなくて、会わせなかったのかも分からない。そしたらすぐガーディアンエンジェルスが、カーチス含めて、代表者が話を進めてくれ、ジュリアーニに会って直訴をしたんです。早い裁判、公正な裁判、そして、一日も早くこの悲報を広く世の中に訴えられるようにしてほしい。すべてアメリカの協力で始まりました。モンデールも動いてくれました。

そういうことから、私は弁護士を探すことになるんです。誰も引き受けてがないんです。日本大使館が紹介してくれる弁護士なんか屁みたいな奴ばかりです。お金の話をする人ばかりだった。アメリカで一つ勉強になったことは、ニューヨークではいわゆる成功報酬制度です。だから、勝ったら貰う。勝てる可能性ということでは、社会派の弁護士がいいのではないかということで、これもワシントンの CSGV という銃規制のロビー活動の最大団体の紹介で、このエリザバースという女性弁護士に巡りあいます。彼女に会って、引き受けてくれるかどうかは、最初は分からなかったです。お互いがアイデアを出しあっていきました。彼女も社会派と言うものの、一人でやっている弁護士ですからお金がないのです。引き受けて貰って、一つはタバコの訴訟から出たアイデアが出ました。勿論刑事裁判が終わらないと集団訴訟にもって行くということができない訳です。私は外国人ですから、一人でやったら、どうしてもそれは不利だろうということで、銃も特定できない。だからいいんだと言う理由から、銃器の製造責任訴訟を起こした。今、忘れもしません。初公判にもって行くためにはですね、これは刑事事件の時の様子ですね。刑事事件裁判が終わった時の様子です。禁固 25 年以上が出たということで抱き合っているのは、速

捕した時の刑事、カルロス・ゴンザレス。小田君が横にいます。彼は私の裁判中つきっきりだったのです。そういうことで日本で彼がガーディアンエンジェルスを作るという時には私ども、特に私はこの義理もあります。何とかこういう事ができないものかという風に、警察との連携を提案して、今、まさに彼一人で日本で活躍の舞台を大きく育てているというふうになりました。

これはロスアンゼルスタイムスからだと思いますけど、息子を撃った犯人が25年の刑に処せられ、25年以上終身。25年間は仮釈放の裁判がないという限定つきです。この後、ニューヨーク州は死刑が復活するんです。残念ながら死刑に持っていくことはできませんでした。

私たちの活動の中には、こういうことも服部さんたちと一緒にやっております。ピッチというロゴマークが筆箱だとか、鉛筆だとか、消しゴムだとかにつけられて、子供たちにいい影響がない。これを持ち込まれたのは、アメリカで活動されている普通のご婦人です。留学生を預かって、こういうマークのついたTシャツを日本の少年が着ていた。大変恥ずかしい。バス停で怒られているのを見たということで、これを我々ストップガンキャラバン隊の活動として会社を訴えました。結果的には特許庁からも商標登録が差し止めになるとか、この会社もなくなるとか、いろんなことに発展していった事がございます。これはそういう活動が「ライフ」に紹介された時のものです。

これはサイレントマーチという活動でございますけれど、ワシントンの議事堂前に大きな池がございます。その前にアメリカで銃犯罪に巻き込まれて亡くなった御遺族がその亡くなった方の靴を並べる。サイレントだから、無言ですね。無言で靴を並べる。この活動にももちろん服部さんも参加されましたが、私も参加しました。大変な威圧を覚えました。どういう威圧かと言いますと、私は映画で見たことのある、ポーランドのアウシュビッツ収容所。映画で見たことあるでしょ。ガス室に送った人たちの遺品とかを山積みにする、ああいう言い知れぬ迫力。私が出たのは、94年の大会でしたが、4万足以上の靴がありました。4万人以上の方がその年亡くなったということです。そのときのニューヨークは非常に治安が悪い状態で、頭の中の記憶が正しければ、2900人くらいの方が1年間で亡くなった。50州全部集まって、遺族が靴を並べるんです。何周も何周も靴が池を囲むのです。こういう現実を目の当たりにしてみても、アメリカと言う国は大変な国なんだなと。こいつらを相手にたった一人でアメリカに挑むってことがどんなことか想像もしていなかったので、記憶の中を辿ってみますと、皆から「止めろ止めろ。お前が殺されるから止めろ」と言われたことを覚えています。

これが銃メーカーの責任を問うということで、読売アメリカに出たものでございます。私、杖ついていますよね。ベルギーに1年留学してまして、寒い所っていうことを知ら

なかったものですから、マイナス 10 度の世界で、石畳が凍っていて、階段から落ちて自分で足を折って、そのまま松葉杖ついて裁判に臨んだわけです。この前に「デポジッション」というのがありまして、「予備知識」ということなんですけど、集団訴訟ですから、訴えた銃器のメーカーが大弁護士を編成して訴えた人々を次々呼び出します。アメリカでやる裁判の制度ですから、ちょっとピンと来ないかもしれませんが、原告側が被告側に呼び出されて「お前、本当に訴える気か、お前の訴状は本当に正しいのか」ということを確認して審議します。これは朝の 7 時くらいから夜遅くまで缶詰になって、とにかく CC タイム、おしっこに行く時間くらいしか許されない。相手はお金があるから大弁護士です。メーカー社づつの弁護士が何人も来ていますから、その弁護士がたった一人の私を捕まえて、ネチネチネチネチ朝からやるんです。お金がないんで、こっちの弁護士はデポジッション専門の弁護士も女性で、デボラという方一人です。朝から缶詰でガンガンガンやられる訳です。言葉がほとんどわからないというのもきつかったですけれども、その時はここにいるガーディアンエンジェルスの小田君が急遽ピンチヒッターで通訳にさせられたんです。させられたってというのは、どういうことかっていうと、相手は自分の有利に都合のいいように通訳を雇っています。法廷通訳です。その法廷通訳というのは、こっちの理解はほとんどしない。相手側に立った通訳をしますから。やはり危機感がつのっていますから、これはおかしいという所が多々あった訳です。「こんなだったら俺は帰る！家へ帰る！」って怒鳴って啖呵を切ったわけなんですけど、じゃあ通訳いないじゃないかということで、たまたま小田君と眼があった訳です。小田君に通訳をしてもらった。通訳は通訳をやるんだからいいんですけど、職業が通訳じゃないもんですから、いくら英語ができると言っても大変な心労があったと思う。二人で帰ってベッドに倒れこんだことを記憶しています。それくらい神経を使うドラマを体験した訳です。それは「ポーリングフォーコロナバイン」で出てきた映像を見ながら自分と重なるような状況であります。それくらい強い裁判だったんです。

先ほどのエリザバース、彼女が初めて公判に持ち込む為の、訴状を読み上げる提訴の日がニューヨークの連邦裁判所でありました。その日、訴状を読み上げるのに、こうやってブルブルブル、もう見ている分かりますけれども、ブルブルブルブル震えるんです。その訴状を提訴して受け入れられなかったら公判には持ち込めない。だから、全米史上初の勝訴と新聞に書かれていますけれども、これは第一回目の、デポジッションの前の公判への提訴をした段階で、そこでは、ほとんどが銃器訴訟というのは、外されて、公判に持ち込めたことがなかったというのが現実なんです。だから、その時、覚えていますけれども、帰りがけにお茶を飲みに行ったんですね、そしたら、「次又会えるのは、私が生きてたら。きっと会おうね」。生きてたらって言うくらい危険な状況を踏まえて、その裁判をやりあうのです。アメリカにはどんな人がおるか分からん。圧力をかける連中がいつ自分を襲ってくるかもわからないという危機感もあったんだろうということを考えます。メーカー

一の責任を問うということを書いていますけれども、「販売会社 67 社相手取り」というふうに書いてありますが、67 社全部が私どもに対してどうこうということではなかったんです。最終的には私は「勝った、勝った」と言っていますけど、集団訴訟の中で、勝った方がたった3名です。勝訴した方で、賠償を頂いたのはたった1名。だから、本当の勝利かどうかは分かりません。おまえ、裁判で儲けたらろうというような、こういう変な質問をされる方が日本で多々あります。確かこれが裁判の額 140 億ぐらいの賠償請求額だったと思うんですけど、出たのは、1名の青年、19 歳だったんですけど、脳に障害があるということで、その方に、円に直すと5600万円ぐらいの賠償が下りたということだったと思います。最終的には、コルトというピストルを作る会社が生産を止める。ピストル生産から手を引くということが報じられた事がございます。それからスミス&ウェッソンもそういう方向に行くということが出てきたと思います。

賠償金というのは一例だと言う事が出ています。ルイジアナで服部剛丈君事件をずっとサポートした賀茂先生という方が、ここで、「山が動き始めた」というふうに書いておりますけれど、銃製造業者販売業者を 67 社、実際は 48 社を相手どって、ここの総額約 1400 万ドル、約 16 億 1,000 万円の損害賠償を求めて起こしたんです。ただ、それが一人の少年に対する認定だけしかしなかった。それは、ニューヨーク州の法律では、死んだ人に対する遺失利益ってことが認められない。裁判でそういうものがないということが分かりました。遺失利益というのは、私の息子が 22 歳で死んだんですけど、この子が生をまっとうしてリタイアするまで働くといくらかの収入を得る。その収入を得ることの中の計算上、これだけの利益を損失すると、遺失利益の考え方を日本ではするんですが、アメリカではそういう考え方がない。だから死んだら損ということですね。そういうことで裁判でのお金は儲かったでしょうといわれても儲かるわけがないんですけど、出ませんでした。裁判の費用ですけど、最終的にはどれくらいかかったか分かりません。何千万とか、億の単位のお金が要っただろうと思います。これも勝って弁護士が貰うという方法ではございませんので、当然のことながら浄財によって長い裁判を闘ってまいりました。それはほとんどアメリカの方からの寄付でございます。

「銃弾丸製造業者責任被害者側が一部勝訴」と書いてありますように、これは一部の勝訴です。先程言いましたように、裁判は最終的には、集団訴訟で最初提訴する時には入ったのは 30 数名でしたが、デポジッションで、ほとんど振るいにかけるんです。アメリカ人でさえ、そのデポジッションで「もう止めてくれ」と泣くのだそうです。というような体験をして落とされるんですね。最終的に最後の公判に残った被害者は 19 名くらいだったと覚えとります。

この後銃器製造メーカーが反撃をする。もう屁理屈をこねる訳ですから、当然のことながら色々なことをこねくり回して、銃の正当性を言う。それは銃器製造メーカーというの

は、大きい所ばかりではなく中小企業が多く含まれておりますので、会社が潰れるとか色々な事が起こります。それから、フロリダだとか銃犯罪の多い地域、他の地域含めて各州で銃器製造責任訴訟を始める動きが出てきたものですから、逆に言うとルイジアナなんかは議会でそれを答申することを禁じるというような法案まで作るような所が出てまいりました。

「銃器犯罪メーカーに責任要求実際勝訴に弾み」という事が書かれております。日本でもそうなんです。治安が悪くなるということは社会的負担が増えるということですね。救急車の出勤回数を見てもそうです。その方が生きて活動すれば、経済的効果があるわけですが、その方が亡くなるということで経済的損失、それに伴う支出、救急車の発動回数が増えれば増えるほど大変な行政支出があります。そういうことから治安の悪化は経済の悪化につながるという、もう分かりきった事例だと思います。ニューヨークは私の息子が死んだ時は治安が悪く、タイムスクウェアには今日は何人銃で死んだというのが、大きなネオンで出るような時代だった。今はタイムスクウェアは、ジュリアニーの影響もあったんでしょ、一生懸命警察の数を増やして治安に努力した。プラットという警視庁の総監みたいな人をボストンから連れてきて、我先に犯罪地にジュリアニーと一緒に乗り込んで行って治安に力を入れた。今はタイムスクウェアは観光ナンバーワンですね。ディズニーの再開発もうまくいっているようです。そういうふうにならなくなって行った。

メーカーと州議会の対立が鮮明になってきた。さっきトムさんに記者会見の席で質問がありました。大統領選挙の行方が気になるというご質問がございましたけれど、今の情勢は私には全然分かりませんが、銃規制派と賛成派というのが、常にアメリカでは拮抗するような状況が社会活動上見られる。日本ではない風土だろうと思います。産業界に不安があって、州議会に封鎖を命じるというようなロビー活動が大変強く起こっている。私たちの政治風土とまるで違うということが、こういう状況からお分かりいただけるかと思いますが。

コルト社がこの裁判の後、一般向けの短銃製造から撤退した。コルトと言えば西部劇に出で来る拳銃ですね、ああいうメーカーもこの衝撃を受けて製造から撤退したわけです。銃器製造責任訴訟は簡単に言えば、タバコ訴訟。タバコの煙を吸うことによってこれが弊害になる。弊害には実はこれだけある。ということは製造者にも責任があるんじゃないかというような裁判であるということです。最初の公判の提訴を覚えています。猫いらずと同じで動物やペットはとらしたくない。しかし、これをペットに食べてはいけませんよという表示はできません。ペットは字が読めません。それと同じように銃器を作った側が、製造責任を今で取られてなかったこと自体おかしいんじゃないか、これは、危険なものを作っているのだから、当然のこと。

アメリカですごい作品がありましたね。ポスターで赤ちゃんが銃をいじっている写真。

その赤ちゃんは頭を撃って死んだんですね。そういうような、サイレントマーチに出たら、こんなちっちゃな1歳にも満たない赤ちゃんの靴がたくさん並んでいるんです。びっくりしましたね。わざわざこんな子を殺す訳じゃないんです。銃が家庭にあることによって起こっている悲劇。夫婦喧嘩でパッと銃を抜く。親子の政治思想の違いから、パッと銃を抜く。そういう事が多々起こってきておるんです。

これは今日おいでのコロラド州の乱射事件を報じたコロンバイン高校の報道です。たまさか新聞を探しましたら、こういう記事がありました。ここの新聞に写っている方が今日、後ほどお話するトムさんです。この後、ちょっとだけ、皆さんに東京大会のご案内をさせていただいて私の話を終わりたいと思います。これは見たくない人は目をつぶっていただいでいてけっこうです。人間の生体というのは、壊れるということを東京大会では言おうと思うのです。「貴様！頭をぶっ飛ばすぞっ！」いう。頭が飛ぶということはどういうことかということと言いますと、これは銃器によって頭が飛んだものです。昨年12月に国松長官と福岡で、南カリフォルニア大学の外傷外科医を招いてプロブレッションした時に使った写真です。この医師は自分の弟も殺されています。ドクター・アセンシオといって、外傷外科医としては大変有名な方です。イラクに米軍が戦争に行き、必ず、南カリフォルニア大学のこのバイオレンスの科と医学部の中に、犯罪に巻き込まれて入ってくる救急患者を扱う外傷外科があります。世界最大級です。だから、イラクへ行く軍医さんは、すべてここで研修を受けて行く。毎日毎日毎日毎日もう怪我した人が山ほど入ってくるんです。私も行ってましたけど、もう次から次へと入ってくる。ワーワーワー泣く。刺青いれたのがいっぱい泣く。ワーツと野戦病院みたいになるんです。彼は外傷外科のトップですから、こういう人を手術する。自ら写真に撮る。それを刑務所だとか、少年院とか、高校に持って行ってパーソナルなボランティア活動をやっているんです。

ゲームを見て撃たれるという感覚分かりますか？ゲームの中ではすぐ死にますよね。又起き上がってきますよね。だから、人間が撃たれる、生体が壊れるということは、どういうことかということを見せて、倫理の壊れた、倫理のない子供に、「貴方はこういうことをしてはいけませんよ」と言う。分からないから何べんでもやる。彼らの活動で、少年院へ戻るのが7割以上ある。これを見て少年院へ戻る子供が3割減ったというんです。

こういう現実の話の中で使った写真でございます。これは銃の抗争事件で心臓を撃たれた少年を救う時の手術の写真です。穴が開いていますね。この子は死んだと思いますでしょ。この後に生きている所をお見せしますからね。こうやって弾を取り出すんです。この子です。今は立派に更正してギャングをやっておりません。もちろんギャングだったので。抗争事件で自分も撃たれたのです。

銃器製造責任訴訟というのはさっき申し上げましたように、タバコの訴訟に私どもがヒントを得たわけです。服部さんの並々ならぬ執念でご活躍をなさった。お子さんを銃のな

い日本に連れてきて YOSHI 基金で何とか次の世代に橋渡しをしたい、その意欲の現れとして大変尊敬の眼で見られておられると思います。

ただ、一方では現実にこういう社会が私たちの足下に近づいているということも現実なんです。何故そんな社会になったのか。考えてみたい。一人一人考えてみないと、崩れて行ったことが元に戻らない。私が初めてアメリカに渡ったのが 1973 年です。ちょうどベトナム戦争が終わったばかりのアメリカです。テレビであったでしょ。セブリセブンサンセットセブン……。ああいうきれいな町がそのままありました。今はハングルの看板がダーッと……。これをきれいじゃないというと怒られますから、そういうような状況の中でアメリカは変わって行きました。それは一つは、戦争の大儀というものを捉えた反戦運動、それからウーマンリブの台頭、ウーマンリブが悪いと言っているんじゃないですよ。それと同時に男が自信をなくす。経済が低迷する。雇用が不安になる。子供たちは離婚した家から外に出る……。すごく日本の現状に似てないですか。薬に手を出す。薬に手をだすと、欲しいから次々に手を出して人を襲う。

もう一つは、大きな変化が見られるのはフロリダだと思うんです。私たちの社会が目の当たりにあるような感じが私はするんです。もう老人ばかりになる。4 人に 1 人は 65 歳以上の老人だといいます。フロリダは、あったかいよ、気候がいいよ、どうぞ来てください。フロリダで余生を送りに来てください。産業がないもんですから、リタイアした人が一番住みやすい街ということをして PR して、リタイアする人たちの年金で潤っていく街づくりを目指した訳です。結果的には潤った。三位一体によって私たちは分権によって地方は地方で教育しろというふうになってくる。アメリカとまさに同じようになって来る。税金の多い地域はたくさんいい先生、いい学校、いい教育ができるかも分からん。税収が少ない学校の地域は、いい学校、いい先生を雇うことはできない。暴力が広がる。これが今のアメリカの地域の現状だろうと思います。そこで、サタデーナイトスペシャル。1000 円くらいのこういう小さい小型拳銃がある。リンカーンを殺したようなこんな小さなタイプのを持って老人を襲う。まさに東京の一番危惧する点ですね。我々団塊の世代が一番増えるのは、まず一番人口の多い東京です。そこに持ってきて少年がこういうふうになりはじめるんですね。

金融の荒廃ということは、社会全体にとって一つもいいことはない。結果クリントンが最後、教育改革を目指したということになったんだらうと思っています。今となっては死んだ人は帰ってきません。私の話が何か皆さんの参考になればありがたいと思います。さっき言いましたように、タバコの訴訟をもちってもじった苦肉の策であったということでご理解を頂き、又タバコの訴訟のことまでやらなければ、自分の心の中に一矢を報いたいという親の一念といいますか、父としての覚悟をこの子に言えなくては、あの世に逝くのが辛かったという自分との闘い。本来で言うと、皆様の前に出てお話するようなことでは

ありません。オヤジがしっかりしていなければいけない。息子の同級生が「おじさん」ってお盆にお墓参りに着てくれる。そんな時に子供さんや奥さんをつれてくる。そういう息子に会うことができない訳です。せめて次の時代の若い人たちにこういうことがない社会を作っていただきたい。治安が何よりも大事。安全は世界インフラの第一優先する課題であるということを皆さんにぜひご理解いただいて私の話は終わりにします。どうもありがとうございました。

【コリー・ダニョール・ハウエル氏講演】

こんにちは。アメリカのサンディエゴから来た Cory Howell です。はじめに日本の感想について話したいと思います。驚いたことは、日本は何て安全な国だろうということです。世界の中でも大都市の東京で、人々が何の恐れもなく、真夜中に歩くことができることです。ぼくが育ったアメリカでは、少し考えられないことです。

それから話にはよく聞いていたことですが、日本は何て混み混みしたところだろうということです。東京に来て初めて実感しました。それまでは、よくわかりませんでした。日本の電車や地下鉄はたくさんあり、待っていたらすぐに電車が来るので、便利ですごく感動しました。そして、その駅ごとに小さなショッピングセンターやいろいろな店が整っていることにもびっくりしました。アメリカでは、食料品を買う、映画を見に行く時には、住宅地とは別の店が集まっているところまで、車で行かなくてはなりません。アメリカでは、住宅地の中に店がありませんが、日本は、ほんの数分歩くだけで家の近くの店に行けて便利だと思います。

日本の高校について感じたことを話します。日本の授業は、先生がしゃべるばかりで、生徒の質問が少ないことにびっくりしました。アメリカでは、授業がディスカッションのようです。アメリカの高校は、義務教育だからでしょうか？日本の高校生には、本当に勉強したいという意欲を強く感じました。日本で困っていることは、あまり無いけれど、何かといえば日本語です。

それでは、次に、僕は YOSHI 基金で来ることができたので、アメリカの銃の問題について話をしたいと思います。アメリカの憲法修正第 2 条では、国民に武器の携帯を許しています。でも、この「権利」について、私たちはこの憲法が作られたときの状況を考える必要があるのではないのでしょうか？当時は、アメリカが国歌として、完全に安定していなかったもので、防衛システムが不安定でした。人々が自分自身の命を守るために、このアメリカ憲法修正第 2 条が成立しました。しかし、時が過ぎて、アメリカの防衛力が向上してきたので、今では、一般の人々が銃を持つ必要性は無くなりました。

ところで、「ボーリング・フォー・コロンバイン」という映画があるのですが、その中で

監督のマイケル・ムーアが示しているように、今は、昔より銃を手に入れることが簡単です。例えば、「口座を開いたら“ただ”で銃を差し上げます。」という宣伝文句の銀行がありました。それを確かめるために、ムーアが実際にミシガン州で銀行口座を開きました。そして、本当にライフルを手に入れることができました。このように、銀行やウォールマートのようなスーパーマーケットまでで、誰でも銃を手に入れることができちゃうのです。

“武器を携帯する権利”は、すべてのアメリカ国民に与えられていますが、簡単に手に入れることができなかつたり、何か資格が必要な州もあります。でも、ミシガン州では、ほんとうに簡単に店に入っていけば、ほとんど時間もかからずに銃を手に入れて出てくることができます。この信じられないような銃規制の緩さが、誰もが簡単に銃を持てる状態を作り出しているのです。また、子供の好奇心や、親のまちがった判断が子供を危険にさらしています。父親がガレージに銃を置いていただけでも、子供が死に至ることさえあります。銃が簡単に手に入れることが、このようなことを引き起こしているのです。

日本に来てから、ニュースを見たり聞いたりしていると、「アメリカと違うな！」と感ずることがあります。例えば、アメリカのテレビでは、警察の視点で暴力などを、まざまざと見せつけます。アメリカでは、暴力や恐怖のシーンが視聴者を楽しませ、視聴率が高くなるとさえ考えているのかもしれない。これに対して、日本のテレビの場合は、見ている人の視点でとらえています。

“コンピュータの2000年問題”が原因で、“核兵器”までが誤って作動する恐れがあると言われて、大騒ぎになりました。結果は、心配だけで終わり、これもメディアに振り回された一つでした。この“コンピュータ2000年問題”からもわかるように、メディアがアメリカ国民へ与える恐怖感が、“自分を守る”という行動を起こさせているのです。つまり、銃を手に入れることになります。

このような、「銃の簡単な入手や携帯」という問題を考える機会を得ることができたのは、YOSHI基金で日本に留学することができたからだと思います。服部さん夫妻をはじめ、私を支えてくださった方々に、心からお礼を申し上げます。本当に、ありがとうございます。

【トム・マウザー氏講演】

ご紹介ありがとうございます。このような機会にお招きいただき、光栄です。主催者の中にお子さんを私の国で銃でなくされた方が何人もいらっしゃることを大変申し訳なく思います。ストップガンキャラバン隊のみなさんと私には共通点があります。銃によって息子を失う痛みを共有しています。その死をただ嘆くのではなく、世界がより良くなるように、積極的に取り組む道を選んだことも同じです。他の人たちが同じ苦しみを味わうこと

のないように。

私たちの長男ダニエルは、シャイで、陽気で、純真で、笑顔が可愛いく、優秀な生徒で、私の誇りでした。まだ 15 歳でした。事件の日、私はオフィスをでるところでした。同僚が私にリトルトン市在住か、コロンバイン高校に通う子どもがいるか訊きました。私が「イエス」と答えると、彼らはニュースを見るように促しました。まだ死者の確認はなく、混乱の中、学校から逃げる生徒たちと発砲の報道のみがされていました。私は今も罪の意識を感じています。息子のことをあまり心配せず、こう考えていました。「2000 人の生徒の中で、息子に何か起こる可能性はどれくらいだ？2000 分の 1？」しかし、最悪の事態は起こったのです。

アメリカ人は誰も、自分が銃の犠牲になるとは考えていません。しかし、それは間違っています。年間約 3 万人が銃で亡くなります。これは 9 月 11 日の同時多発テロ犠牲者の 10 倍にあたる数字です。3 万人のうち：約半数が銃で自殺し約 1 万 1 千人は殺人、残りは事故によって命を落とします。年間 10 万人以上が銃により負傷します。アメリカはこれらの数字を恥ずべきです。

私と妻にとってダニエルの死はとても辛いものでした。しかし、私たちは息子が生きた証として、その人生を無駄にしない決心をしました。グアテマラの学校に送る援助などの資金集めをし、中国から養女をもらい、息子のウェブサイトを立ち上げました。(www.DanielMauser.com)私は一年間休職し、より強力な銃規制を目指して戦うリーダーとなりました。

私の住むコロラド州で、ある銃規制法案を住民投票に持ち込むのに成功しました。有権者の 70%がその銃規制法に賛成しました。機会さえあればアメリカ人は強力な銃規制法をつくりあげるので。私は息子の人生だけでなく、その死についても人々に話します。その痛みと、銃暴力は誰にでも降りかかることを分かって欲しいからです。銃で撃たれる犯罪者か、麻薬販売人、あるいは、無謀な人だけだと思いつくアメリカ人がいます。しかし銃暴力は誰にでも起こりうるのです。

銃規制について話す時、私はダニエルを偲び特別なものを身につけます。彼が殺された時履いていた靴です。この靴は、他の親が、私のような境遇にならないように願うシボルでもあります。親は我が子が何歳になろうと殺されてはたまりません。海外からよく「米国では、こんなに銃による死者が多いのに、なぜ多くの銃が、簡単に手に入るのか」という質問が届きます。その答えは簡単ではありません。銃を奨励する人達は、「暴力的な犯罪者から身を守る必要があるためだ」と、簡単に答えます。しかし、銃が大量にあり、規制が少なく、誰もが簡単に銃を入手できる状況が、犯罪者の手に銃を渡り易くしていることを、彼らは認めません。大量の銃があるのに規制がほとんどないのは「全米ライフル協会(NRA)」

のような団体が銃規制の成立を妨げてきたからです。銃の奨励者は、銃が手に入り易いのは、銃を持つ権利を憲法が保証しているからであり、重要な自由の一つだと主張します。十分な議論をする時間がないので、憲法修正第 2 条は裁判制度の中では異なって解釈されていると言っておきます。大多数のアメリカ人は、銃所有の基本的権利を支持する一方で、それが絶対的なものだとは信じてはいません。安全のために銃規制の必要性があると大多数が理解しています。

それではなぜ、多くの命を犠牲としながら、銃が簡単に手に入るのでしょうか。ひとつには、恐怖を感じているアメリカ人が多いからだと思います。強盗に遭ったり、通りや家で撃たれるという犯罪の恐怖です。米国では、とりわけ特定の地域では犯罪率が高く、中には残酷なものもあります。しかし、犯罪率はここ 10 年以上減少傾向にあります。めったに自宅では襲われません。加害者のほとんどは見知らぬ人ではなく知人です。それでも人々は犯罪者を恐れ、家庭への襲撃を必要以上に恐れます。なぜでしょうか？

私は「ボーリング・フォー・コロンバイン」で監督が述べたことに同感です。彼は、アメリカ人は、メディアによって恐怖を煽られていると言っています。テレビは、犯罪や病気や危険な情報を撒き散らします。メディアは私達の注目を引くことで金を儲け、私たちは被害を被ることなどほとんどないのに、恐怖に駆られるのです。同じようなことが全米ライフル協会（NRA）のような組織にも言えます。NRA はいつも、銃規制の支持者が銃所持の権利や自衛する権利を奪おうとしている、あるいは、政府は銃を没収したがつているから警戒すべきだと言います。こういう言葉の繰り返しは、恐怖と不信感を生み出すのです。その結果、銃の愛好者は、銃規制の支持者に、いらだつようになります。

銃規制を支持するようになってから、私は何百もの不愉快な手紙、電話、電子メールを受け取りました。私を侮辱し、軽蔑し、息子の思い出を侮辱するものすらありました。ある人は私を殺すと脅しました。多くのアメリカ人が所有物を失うことを恐れ、盗みを働く犯罪者に腹を立てます。恐怖のあまり、盗みの侵入者は撃ち殺してかまわないと思う人もいます。たとえ侵入者に殺しの意図がなくても。銃の支持者は犯罪者の発砲を恐れるべきだと言いますが、犠牲者は知人に撃たれることがほとんどですし、加害者は必ずしも犯罪歴のある人ではないのです。家庭の銃で自殺を図る 10 代の若者たちもいます。両親が銃を遠ざけておかないからです。怒って自分の妻を撃ってしまう男達、頭にきて同僚を撃ってしまう人、車を運転しているときに腹を立て、銃を撃つ人達もいます。銃を手にするると普通の人々が殺人者になってしまいうるのです。「発砲」は新聞の見出しでは当たり前の言葉です。多くのアメリカ人は、それを単に銃を所有する自由の代償として受け入れているのです。

多くの銃が有る別の理由は、銃産業や NRA のような組織の銃器法への影響です。NRA はワシントン DC で最も強大な組織になりました。銃産業はタバコ産業とよく似ています。極めて有害な製品を擁護するため、人々の支持を得られず、金と脅しによって権力を増大しているのです。一例を挙げましょう。過去 10 年間、米国は襲撃銃を禁止してきまし

た。襲撃銃は多くの銃弾を装填でき、軍隊で使われるような銃です。それらの武器を禁止する法律は9月13日に失効しました。米議会や大統領はその法律を更新しませんでした。再び、襲撃用銃や50~100発もの弾を装着できる付属部品が合法で売られているのです。調査では国民の70%以上が禁止令を続けて欲しいがっているのに。NRAはその禁止令が失効しない限り11月選挙の候補者に献金しないともしました。米議会とブッシュ大統領はNRAに耳を傾け、その法律を失効させました。9月13日は私や、アメリカにとって大変悲しい日でした。

私が日本人に敬服することの一つは、間違いが起きたときの責任のとり方です。日本人は直接自分に責任がなくても責任をとります。アメリカではしばしば反対です。誰か他の人のせいにするのです。アメリカにおける銃の死亡率は恥ずべきものです。2億2千万丁もの銃を持ち、それを簡単に入手でき、規制はほとんど存在せず、銃に対する見識といったらお粗末なものです。銃の奨励者はこの状況に責任がありますが、この恥ずべき死亡率には少しも責任をとりません。これらの状況が、死亡率と無関係だなどと言うのは無責任です。

銃の奨励者は、銃による加害者だけを罰するべきだと言います。彼らを罰するのは当然です。問題は、処罰で正義がもたらされても、愛する人は帰ってこないということなのです。アメリカは罰する事に一所懸命です。しかし、犯人の処罰だけでは安全にはなりません。発砲事件を防ぐ方策が必要なのです。

私はまだアメリカに希望を持っています。ソ連の共産主義崩壊の理由の一つは、人々が自分達を取り巻く状況をより理解するようになったからです。海外旅行や、テレビ、インターネットで世界をこれまで以上に知ることになった結果、人々はそれまでの生き方を嫌い、変化を求めたのです。米国の銃にも同じことが起こるでしょう。多くのアメリカ人は米国での銃の犠牲者数の多さがわかっていません。「ポーリング・フォー・コロムビア」で印象深い場面の一つは、米国の銃犠牲者の多さを他の自由主義の国々と比較していたところです。銃の奨励者は、アメリカは他の国とは違うと言います。私はそう思いません。他の国々もアメリカと良く似ていると思います。配偶者を虐待する者もいれば、犯罪者もいる。問題を抱えた十代、腹を立てている労働者もいます。彼らは暴力映画を見、暴力的なビデオゲームをするでしょう。それでもアメリカに比べて銃の犠牲者はとても少ないのです。これは他の国々の厳しい銃規制と、偶然に一致した訳ではありません。

銃に関する法律と姿勢を変えるには時間がかかります。「銃の文化」は過去30~40年かけて出来上がったので、すぐに変えられないのです。又、多くのアメリカ人は、アメリカが全てにおいて世界一だと信じ、他国から学ぼうとしないのです。しかし私は希望を持っています。地球上の国々がもっと身近になり、青年たちの交流、旅行、インターネット上の交流が盛んになるにつれ、アメリカ人はもっと多くを他の国々から学ぶでしょう。大切

なのは、法律だけでなく、銃への姿勢を変えることです。人々のタバコへの姿勢を変えさせたように、喫煙は社会的にずいぶん受け入れられなくなっています。銃にも同じことが起こると思います。銃で安全は保てないことや、銃なしで安全に暮らす人達のことを知り、家庭の銃では知っている人を撃つ確率の方が高いということがわかると、人々の姿勢は変わるでしょう。これが私のアメリカに対する希望です。

息子について感心することが1つあります。彼は恥ずかしがりやで人前で話すのが嫌いでした。しかし、討論のチームに入り、他の生徒たちの前で話すようにがんばりました。スポーツが苦手なのに、学校でランニングチームに入りました。彼は自分の弱点を克服しようとしていたのです。アメリカも弱点である銃による高い死亡率を克服するように努力するべきです。国を批判し、銃を持つ自由と権利を支持しない私には愛国心がないと言う人もいます。そうではありません。私は米国を愛し誇りに思っています。国を愛しているなら、良くなって欲しいと願い、その問題や弱点を見過ごさないはずで、変化を願うはずで、

同じように、ストップガンキャラバンの皆さんや他の日本人に「他国のことに口をだすな」と言ったり、銃規制をアメリカに要求するなというアメリカ人もいるでしょう。しかし、私にはわかりません。あなた方は私と同じくアメリカを尊敬し、心配し、同じ苦しみを味わって欲しくないのです。この世界で生きる限り、そう考えるのが当然なのです。アメリカ人がイラクの人々の運命をそれほど気にかけ、他国の政策に対して自由に発言できるとするならば、アメリカ人はアメリカの出来事に関心を寄せる人々を歓迎すべきです。

あらためてこのような特別の場で話す機会を与えていただいたことに感謝します。息子が銃弾の犠牲になるという、共通の体験をしたのは悲しいことです。しかしここに希望があります。なぜなら、私達はともに悲劇に負けず、前向きに活動したいという望みを持っているからです。本日はどうもありがとうございました。

【質疑応答】

質問

大変考えさせられる内容でした。服部さんの場合は撃った男性を訴えたけれども、急に来たので撃ったということで無罪になりました。それも理解しにくかったけれど、銃を作っている会社を訴えろとか、映画の中でK マートへ訴えに行ったりしていましたが、ああいうこともなかなか理解できない。何故撃った人を訴えるのではなく、製造している所を訴えたのですか。

砂田 最初のいきさつを説明していなかったから、そういうご質問が当然あるかと思います。最初は私は訳が分からなかった。息子が殺されたアパートのいわゆる管理が悪いというふうに最初思っていて、アパートを訴えるという予定でいました。しかし、そのアパ

ートを訴えても、最終的に争点として管理システムが色々ついているんですけど、それをきちんとチェックしなかったから息子が死んだんだとやっても、あまり勝てるという保証がないという弁護士からの話だった。じゃ、何故銃を特定したか、刑事裁判で分かったことなんですけど、どこから銃を買ってきて、何という銃だったのかということになったんですけど、銃器が発見されていないんです。証言だけによりますと、それは状況証拠になりますから、ウインチェスターという銃のメーカーなんですけど、それでもこの裁判では勝てそうにないということでした。特定はできないけれど、その銃が蔓延していることによって起こる被害、製造者側の責任を追及した方がいいという方向に弁護士のアドバイスや、色々あって変化していったのです。それは、タバコを飲む人たちにとって、ウinstonがいいとかラークだとか、特定してませんよね。タバコ全体が及ぼす社会への影響がどうかってことを言っている訳ですね。喫煙する愛煙家とと、嫌煙家と両方おると思うんですけど、そういうことで裁判に持ち込んでいった。日本的にはちょっと馴染みが薄いかもしれませんが、製造する側には社会に出回ることを前提にしている訳ですから、製造者としての責任がどこまであるかということを経験ではっきりさせたほうがいいということで、勝ち負けよりも、まず社会環境に訴えることによって、銃器の蔓延に少しの歯止めがかかるんじゃないかという副産物の効果が多少あります。今のような考え方は、闇雲の中でつかった僕のアイデアでありまして、アメリカ人がどういうふうにしたかというの、大変難しいってことだけが最初にありました。後は弁護士が面白がって一緒にやってくれたという所があります。結果なんですけど、「ロバートケネディ・キング牧師アワード」というのをいただいたのです。これは平和活動をやる人にとってもらうんですけど、銃規制の裁判でこういうものを弁護士が貰ったということは初めてじゃないかなと思います。じゃあそういう社会派になったから、この弁護士は大金持ちになって大活躍しているだろうと思うでしょ。相変わらず貧乏なんです。社会活動をする社会派弁護士というのは、けっしてその金持ちになりたいと思ってするのじゃない。お金もちをイメージするかもしれないけれど、そればっかじゃない人もおられますので。

トム 「ボーリングフォーコロンバイン」の映画の中で確かにコロンバイン高校虐殺事件の犠牲者となった、負傷を受けた生徒がマイケル・ムーア監督と一緒に K マートの本部へ行って銃弾を売らないようにと要求します。K マートは、一応それを受け入れた訳です。で、ここに問題があるのは、K マートというのは、大きなチェーン店でありまして、そういう大きなチェーン店が銃弾を売らないようになっても、小さな店はいっぱいある訳で、そういう小さな店が依然として銃弾を売っている。こういう二つの構造がありますので、色々欠点がある訳ですが、一つの成果としてああいうことも繰り返してほしいと思うわけです。

質問

トムさんが州の法律を作るのに非常に努力されたということですが、もう少しどんな活動をされたのか、どういった内容だったのか詳しくお聞きしたい。今日は随分若い方がいらっしゃるので、日本の若い人たちにメッセージがありましたらお願いしたいです。

トム コロンバイン高校銃乱射事件で使われた 4 つの銃のうち、3 つが銃展示即売会で買われたものです。アメリカではそういう銃の展示即売会というのがあって、そこに大勢の人が寄って来ている。そしてディーラーの所に寄って来て銃の売買が行われるという問題があります。もし、ちゃんとした店で銃を買う時には必ず、買おうという人の経歴チェックというのがあって、その前に犯罪を犯したとか、あるいは、ドラッグの問題があるとか、あるいは精神障害があるといった場合には、その銃を売ることができないんです。ちゃんとした店で銃を買い取るためには経歴調査はきちんと行われる訳ですけど、銃の臨時即売会、そこに持って来られる、個人的な銃の売買についてはチェックがないわけですね。

で、コロンバイン高校で起こった事件の時に使われた銃はそういうプライベートな販売で購入した銃であったから、全然犯罪歴チェックとかなしで購入する事ができた、抜け穴があった訳です。そこで私たちは、コロラド州の州議会を訪れて、議員達にそういう銃購入の抜け穴、それを塞ぐような法律改正をやってほしいと願いに行っただんですけど、議員達はそういう努力をすることを放棄しました。そこで私たちは署名運動を展開しまして、そういう抜け穴を閉ざすような法律を作る住民投票にかけようとして請願書の署名を集めました。そして、その数が多く集まったので、その請願書に基づいて住民投票を実行して、投票者の 70%の賛成、30%が反対という圧倒的な勝利をもって、その新しい要求を実現することかできました。ところが議員達は色んな脅しをもって行動しますが、それはわずかに議員の数だけの間のことであって、200 万とか 300 万という住民の問題になるとそういうことはできませんので、まったくの我々の常識、コモンセンスということが勝利を収めたわけです。

質問

どうやったら銃犯罪がなくなると思えますか。

トム ある人たちは、銃の犯罪を少なくするためには厳しく処罰することだと考えますが、実際にそのことを実行してきた過去を考えますと、むしろ、処罰することで、銃の犯罪が増えてきたという問題があります。一番厳しい処罰は死刑に処するということでもありますけれども、例えばテキサス州では、ブッシュはその出身の大統領ですが、テキサス州は今まで最も厳しい死刑の実行をやってきた州です。しかし、では、その州で銃による殺人行為が減ったかという、決して減っていない。むしろその殺人行為は増えている。従って、一番大事なことは、人々の心を変えるという問題です。それと同時に銃に近づく

機会を少なくする。今のアメリカの法律だと、犯罪というのは、銃を購入して、それを別の人に売るといったのがあった場合、その別の人犯罪を犯した場合は、その銃を最初に買って渡した人は処罰されることなく過ごすというような、矛盾がありますので、やはり一番大事なことは、心を変えて、銃は持たないという気持ちを育てていくことだと思います。

質問

二つあります。一つ目はアメリカの高校生大学生で銃規制運動をしている団体はありますか。二つ目は日本の若者、高校生大学生に期待することは何でしょうか。というのは、僕も銃規制の運動に関心がありながら何ら行動のできないところがありますので。

トム 残念ながら、私の知るかぎり、そういう団体は高校や大学には見当たらない。コロラド州で私たちが運動した時は、学生達も助けてくれましたけれども、やはり、そういう学生がいても、学校がそういう学生を積極的に支持することをしませんので、残念ながらそういう団体が存在するということを書けない事が悲しいです。

できれば交換留学の実行を行っていただきたい。例えばアメリカと日本の学生達が交流して、特に銃の問題についてアメリカの状況と日本の状況の事実を率直に語り合うことによってその違い、アメリカと銃の規制が多い日本、それがどういうふうに違った社会を生み出しているのかということを書き合ってもらいたい。これが一番大事な事だと思います。そして、銃が如何に危険なものかということを書き合ってもらいたい。もし、アメリカの銃を作る会社が日本に輸出することができないというふうに考えるならば、密輸ということはあるにしても、ここがマーケットになると言うことは少なくなると思います。ですから、ぜひそういうふうにして頂きたいと思います。

質問

砂田さん、トムさん、今日は貴重なお話、体験を有難うございました。「ボーリングフォーコロナイン」の中で、スピーチが私はとても印象に残っています。その中でトムさんは、「今のアメリカは何か分からないけれども何かがおかしい」ということをおっしゃっているのがとても印象に残っています。トムさんは、事件の後、何年か運動をしていらっしゃると思いますが、その中で、その疑問の回答を見出すことはできたのでしょうか。

数日後に大統領選を迎えていますが、先程砂田さんのお話の中で、スライドで96年の大統領選の記事と2000年の記事がチラッと出ましたけれど、その時のことを思い出しまして、銃規制の問題が、もうちょっと議論になっていたような印象があるんですが、今回の大統領選の中で、チラッと銃規制にふれられただけで、あまり議論になっていないようです。国民の意識として現段階でのガンコントロールの問題は、皆さんどう思っているのでしょうか。

トム 確かにマイケル・ムーアの映画の中で、私は、このアメリカでは、小さい子供が簡単に銃を買うことができるということはやはり、何かがまちがっているんだということを言いましたが、今でも同じように簡単に銃に近づく。そして親がそれを感知しないという事が問題です。これが一番深刻な大きな問題ではないかと思います。若者の間で射殺しあうという事件は頻発していますけれども、そういう事件がおきると人々はどうしてそんなに簡単に銃が手に入るかなと疑問に思うわけですが、親が、そういうふうに簡単に自分の家から銃が持ち出せるような躰けというか、管理体制を作っているっていうこと、それが一番大きな問題であると思います。

コロラドであった事件の一つですけれども、ハイスクールの女の子が、スポーツチームの男の子を、銃を持っているということで、裁判所に訴えたのです。そしたらその裁判の法廷で、その男の子が、女の子をからかうような、そんな深刻な事が起きています。2000年の大統領選挙の時は銃の問題が大きく取り上げられ、そして今年の2004年には、あまり大きく取り上げられないという理由の一つは、2000年の場合は、コロンバイン高校の虐殺事件が起こり、それがあまりにも大きな事件であったというのがその原因の一つであったと思います。アメリカ人の大多数は銃を保持することに賛成の人が多いです。そして、その銃を規制することをサポートしているのは、民主党ですけれども、やはり民主党も選挙のことを考えるとあまりその問題に深入りすると、自分にとって不利であるという、そういう心理が働いて、大きな問題として取り上げられない。こいう事情があると思います。

それからこういう問題もあります。民主党が一番恐れているのは、所謂ブルーカラーの労働者、その働いている労働者はハンティングが好きなんですね。狩猟が好きです。そして、銃を持つ訳ですから、そのことを考えると、あまり、この問題に深入りしないほうがいいという圧力がかかってくるし、又全米ライフル協会のような団体もそういう圧力をかけています。

質問

規制されるものとしてタバコと銃の規制はよく比較されるんですが、ニューヨークでは、タバコはレストランでもすえないという厳しい規制になっている。理想の規制は具体的にどのような程度の方法が理想とされるのか。

トム タバコの場合には、これは吸わないほうがいいという運動が成功してきたわけですが、銃の規制のこととなると、そんなに関心をもっていないという問題があります。タバコの場合には割合に議会に働きかけていくと言う事が有効だったわけですが、銃規制の問題については、全米銃協会を始めとして、銃を擁護する人たちの力があまりにも強くて心のある人たちが会合することは非常に難しい。この銃規制の問題に関心をもつ人たちは、どちらかというと、色んな他の領域にも関心を持ちます。社会正義の問題

とか環境問題とか。そして、一つの問題に長い間留まって、その運動を続けるということが難しいという弱点があります。銃擁護を主張する人々は、銃の問題だけに限ってプレッシャーをかけ続けるわけですから、そこにやっぱり強調点の違いというものがあります。この難しさを感じます。

質問 世界中には地雷というものが、数多く埋められています。平和になっても地雷が人々を殺し続けています。銃に関しても同様で、平和宣言が出ましたが、銃はやはり人を殺し続けています。やはり一つの機関やひとつの政府だけでは銃に関して解決することはできないということもあると思うんです。僕としては、やはり日本政府も色々な国と協力して、銃規制について考えていかなければいけないと思いますが、先程トムさんの話の中で、日本の政府がアメリカの内政に干渉するのはどうかという意見を持つ人がいました。日本の政府がアメリカの内政に干渉すべきかどうか、トムさんのご意見を聞かせてください。

トム 結局この問題は、今度の11月の選挙で、例えば、ブッシュ大統領が勝てば、アメリカでは難しいことということになる。ですから、私たちは、他の国々が、やっぱりアメリカに対して、あなた方が銃を作っているという事が他にどう影響を与えているか、銃の影響力を考えていかなければいけないということをやっぱり言い続けてほしい。そうすることによってアメリカは変わっていきます。

質問

質問というよりお願いですが、私の可愛い教え子は、今ミシガンにいます。息子も、この夏ずっとワシントンへ行って勉強していました。それから私の姪はずっとアトランタに定住しております。アメリカの安全というのは、私どもにとって本当に身近な関心事。自分の問題なんです。他国の人が出すなということではなしに自分の家族が、自分の息子が、自分の教え子がアメリカでお世話。そのアメリカが安全であるかどうかは、本当に私どもの切なる願いなんです。中でガンコントロールの運動をなさっている方に対して、日本人は心からの声援を送りたいです。これは他国からの干渉ということではなしに、アメリカの安全は日本人の問題でもあるし、他の国民からも重大な、そうあってほしいという願いであるということ、ぜひトムさん、アメリカへもって帰ってお伝えしていただきたいと思うんです。

トム はい。伝えたいと思います。

以上